

「定州漢墓竹簡『論語』」試探（三）

高 橋 均

0. はじめに

本稿はさきに発表の「定州漢墓竹簡『論語』」試探（一）（二）⁽¹⁾に続くものである。

その（一）は、河北省文物研究所定州漢墓竹簡整理小組によって整理され、「校勘記」が付けられて1997年に文物出版社から出版された「定州漢墓竹簡『論語』」について、その本文と「校勘記」を検討し問題点を指摘することを目的としたものである。（二）は、拙稿（一）で明らかにした問題点にもとづき同書の「校勘記」を補い訂正を試みたものである。

1.0 「定州漢墓竹簡『論語』」と三論

本稿は、「定州漢墓竹簡『論語』」と魯論・齊論・古論のいわゆる三論との関わり、さらにはこの「定州漢墓竹簡『論語』」は論語伝授の中にどのように位置づけることが可能かを明らかにすることを目的とする。

1.1 魯論・齊論・古論三論の伝授と論語の校訂

「定州漢墓竹簡『論語』」（以下、とくに区別を必要とする場合を除いて「竹簡論語」と省略する）は、既述したように五鳳三年（BC55年）より以前に書写されたものであると認められるから、いわゆる三論の魯論・齊論・古論が並び存した時期とほぼ重なる。そこで、次にこの「竹簡論語」と三論とがどのような関わりを持つのかについて検討を進めることとする。

このことを考える前に、まず論語伝授の状況を何晏の論語集解序によって見てみることにする。すると伝授の状況は時期的に三区区分してみるとわかりやすいようである。三区分の第一期は、魯論・齊論・古論の三論が並立して交渉を待たない時期であり、第二期は、魯論と齊論の二論が交渉をもつ時期であり、第三期は、三論が交渉をもつ時期という区分である。第一期の三論並立期の伝授とそれに係わるのはつぎのような人びとである⁽²⁾。

魯論語二十篇 太子太傅夏侯勝（前152—前61）…少傅夏侯建
前將軍蕭望之（前109—前47）
丞相韋賢（前140—前59）…子玄成（？—前36）
「漢中壘校尉劉向（前77—前6）言魯論語二十篇」

齊論語二二篇 琅邪王卿（前100）「以論語教授」
膠東庸生（？）
昌邑中尉王吉（？—前48）
「齊論語二十二篇，其二十篇中章句頗多於魯論，…故有魯
論有齊論」

古文論語二一篇 孔安國（？—前100）…馬融（後79—後166）
「齊論有問王、知道，多於魯論二篇。古論亦無此二篇，分
堯曰下章子張問以爲一篇，有兩子張，凡二十一篇。篇次不
與齊、魯同。…
古論唯博士孔安國爲之訓解，而世不傳。至順帝時，南郡太
守馬融亦爲之訓說。」

この三論伝授についての記述をみると、三論がそれぞれ独自に伝授されていて
その間に相互の交渉はないようにみられる。そこでこの時期を第一期の三論並
立時期と見るのである。伝えた人の生卒時期からみて、だいたい前100年から
前50年くらいまでの時期を当ててよいのではなかろうか。この三論については
並立して存在したこと、三論の篇数に差異があったことは分かるが、そのテキ
ストが伝わるわけではなく、テキストの具体的な様相がいかなるものであつた
かを知ることはできない。

その第二期は、魯論と齊論とが交渉を持つようになる時期である。集解序に
は次のような記述が見える⁽³⁾。

安昌侯張禹本受魯論，兼講齊說，善者從之，號曰張侯論，爲世所貴。
魯論と齊論をうけて安昌侯張禹（前80—前5）によって行われた、いわゆる張
侯論の成立がそれである。張禹はもともと魯論を受け継いでいた。彼が行った
のは、魯論を中心に、それに齊説を取り入れることであった。この張侯論は世
に重視されたいが、具体的にどのようなテキストであったのかということ
までは分からない。彼の生卒時期からみて、第二期を前50年から零年あたり
に設定する。

その第三期は、魯論・齊論・古論の三論が交渉を持つようになる時期である。集解序には次のような記述が見える。

漢末、大司農鄭玄就魯論篇章，考之齊、古，爲之註⁽⁴⁾。

後漢の鄭玄（後127—200）によって行われた、三論の校訂がそれである。鄭玄の場合も、張禹の場合と同じく中心となるのは魯論であって、それに、齊論・古論を参考したのである。鄭玄の生卒時期から考えて、第三期を後150年から200年あたりに設定する。

以上、集解の序によって三論の伝授と張侯論と鄭注論語の成立した時期とを考えあわせ、論語の伝授時期を三期に区分してみた。ここに、「竹簡論語」の書写された時期とを比べ合わせると、「竹簡論語」は論語伝授の第一期末に当たり、さらに、張侯論が成立する第二期にほぼ重なる時期と見ることができ。第一期末ということは、三論が並立して伝承されていてまだ相互に交渉が生じない段階である。そして張侯論との関係でいえば、「竹簡論語」が書写されている時期の下限は張禹の生年より後であり、しかも、張禹が論語の専門家として世に知られる時期とほぼ重なるのである⁽⁵⁾。ここから、「竹簡論語」は三論のいずれかと近い関係に有るテキストの可能性がまず考えられるが、また、張侯論と関連を持っている可能性も視野にいれておかなければならないであろう。

1.2 「竹簡論語」は魯論か

「竹簡論語」が三論のいずれと近い関係にあるのかという問題について、「竹簡論語」の編者は、「竹簡論語」とともに蕭望之の奏議が出土していることに注目する。というのは、蕭望之が魯論語の伝授にかかわる人物であることは漢書芸文志、集解の序にも明言されており、その人の奏議と論語とが劉脩の墓と一緒に埋葬されていることをよりどころにして、その論語が魯論語ではないのかという推測を立てるのである⁽⁶⁾。これは「竹簡論語」の発現状況からみた推論である。

テキストの面から見た場合、どのようなことが考えられるのであろう。三論と「竹簡論語」との関係を解くカギは、「竹簡論語」堯曰篇の末尾にあるとみられている。そこで以下、堯曰篇が抱える問題について検討することとする。

今見るところの堯曰篇は、全三章から構成されているが、従来問題の多い篇とされてきた。漢書芸文志に「論語古二十一篇。出孔子壁中，兩子張⁽⁷⁾」と記される。いうところは、古論には「子張篇」が二篇あるということである。こ

れに関しては如淳に注があって「分堯曰篇後子張問『何如可以從政』已下爲篇、名曰從政」というから、古論にある二篇の子張とは、一つは今みる子張篇で、もう一つは堯曰篇の「子張問於孔子」章ではないかという推定が成り立つ。そこで問題は、堯曰篇第三章の「子曰不知命」章であるが、この章については經典釈文につぎのような記述が見える。

孔子曰不知命無以爲君子也。魯論無此章、今從古。

釈文のこの文は、すでに触れたように鄭玄の「魯論読正」の一条を陸徳明が經典釈文中に引いたものである。その言うところは、鄭玄が論語を校訂するに際しては、「子曰不知命」章が魯論には見えないが、古論には存するので、存する古論を是としてこの章を自らの校訂本に取り入れたと言うのである。

ここに引いた漢書芸文志と經典釈文の記述を合わせてみると次のようになるだろう。今三章で構成されている堯曰篇は、古論では、「堯曰咨」章のみで堯曰篇が構成され、「子張問於孔子」章以下は「両子張」のうちの後の子張篇（如淳の説によれば「從政篇」）ということになる。それに対して魯論の堯曰篇は、「堯曰咨」「子張問於孔子」の二章だけから構成されていて、「子曰不知命」章はなかったのである⁽⁸⁾。

ここで「竹簡論語」堯曰篇の末尾をみると、「子張問於孔子」章の最後の句である「……内之邾胃之有司」で文が終わっている。そして「校勘記」によれば⁽⁹⁾、その後二つの丸い点をつけて上章と間隔をおいて、小字・双行でつぎのような文が書き加えられているのである。

- ・子曰，“不知命，無以爲君子；不知禮，無以
- ・立〔也；不知〕言，無以知〔人也〕

「竹簡論語」に添えられている「校勘記」によれば、「子曰不知命…」の部分は文字の大きさや記述の形式の点で他の部分と区別されるという。さらに「竹簡論語」には章数と字数とを記す竹簡が同時に見いだされている。その中に「凡二章 [凡三百廿二字]」なるものがあり、「二章」という少ない章数からみてこれが堯曰篇の章数と文字数を示したものと考えられる⁽¹⁰⁾。もしこれが認められるのであれば、「竹簡論語」の堯曰篇は二章で構成されていたことになる。とすれば、これはまさに先に記した魯論の条件に合致するので、「竹簡論語」が魯論であることの有力な根拠となるのである⁽¹¹⁾。

以上述べてきたことは、第三期に属する鄭玄の説によって魯論の形を推定し、それにもとづいて立てた説である。

2.1 「竹簡論語」と鄭玄の「魯論読正」

そもそも、魯論といい、斉論といい、古論といい、その篇数の概要は漢書芸文志や集解序などの記述から分かって、篇や章の排列、字句がどのようなものであるかまでを知る術はない。魯論の字句がいかなるものであるかをわずかながらも知らせてくれるのが漢石経の残石であり、魯論・古論の字句にどのような差異があるのかを間接的ながら知らせてくれるのが、經典釈文に引かれる鄭玄のいわゆる「魯論読正」の記事である。そこでまず「魯論読正」に記される魯論・古論と「竹簡論語」との関連から検討を始める。

陸徳明は「魯論読正」の記事を「凡五十条」というが、今見ることができるのは、今本の經典釈文に記されている23条、日本につたわる論語集解古抄本に校記された經典釈文を拾集して21条、両者を合わせ重複しているものを除外して29条である。この29条中、「竹簡論語」に残存する語句に言及する「魯論読正」は、15条である⁽¹²⁾。これに魯論に言及する16、釈文以外から汗簡の17を採り、さらに頁字の異同を加えて、あわせて18条である。その一覧が次である。(一覧で*を付したのは論語集解古抄本より拾集したものである。また、句末の(7--17)は述而篇第17章であることを示す)

- 1 「學易 魯讀易爲亦，今從古」(7--17)
- 2 「正唯 魯讀正爲誠，今從古」(7--34)
- 3 「坦蕩蕩 魯讀坦蕩爲坦湯，今從古」(7--37)
- 4 「冕 鄭本作弁，云，魯讀弁爲紕，今從古，鄉黨篇亦然」(9--10)
- 5 「仍舊慣 魯讀仍爲仁，今從古」(11--14)
- 6 「而歸 鄭本作饋，饋酒食也，魯讀饋爲歸，今從古」(11--24)
- 7 「行小慧 魯讀慧爲惠，今從古」(15--17)
- 8 「廉 魯讀廉爲貶，今從古」(17--14)
- 9 「天何言哉 魯讀天爲夫，今從古」(17--16)
- 10 「而窒 魯讀窒爲室，今從古」(17--21)
- 11 「孔子曰不知命無以爲君子也 魯讀無此章，今從古」(20--3)
- 12* 「而殿 鄭云魯讀(殿)爲振，今從古」(6--15)
- 13* 「抑爲 魯讀(抑)爲意，今從古」(7--34)
- 14* 「不愿 魯讀(愿)爲他乱，今從古」(8--16)
- 15* 「侍於君子 魯讀侍坐於君子，今從古」(16--6)

- 16 「賦 梁武云，魯論作傳」(5--8)
 17 「公綽 本又作綽」(14--11) 汗簡下之一：綽，綽。見古論語。
 18 貢字について

この一覧に「竹簡本」「集解本」を合わせて、整理したのが次の表である。(数字は上表と対応している。)

	「竹簡本」	「魯論」	「古論」	「鄭注本」	「集解本」
1	亦	亦	易	易	易
2	誠	誠	正	正	正
3	坦蕩	坦湯	坦蕩	坦蕩	坦蕩
4	綽	綽	冕	冕・弁	服周之冕・麻冕
5	無此字	仁	仍	欠	仍
6	歸	歸	饋	饋	歸
7	惠	惠	慧	欠	慧
8	廉	貶	廉	欠	廉
9	天	夫	天	欠	天
10	室	室	室	欠	室
11	無此章	無此章	有此章	欠	有此章
12	殿	振	殿	殿?	殿
13	印	意	抑	抑	抑
14	願	他乱	愿	愿	愿
15	侍於君子	侍坐於君子	侍於君子	欠	侍於君子
16	賦	傳	不明	賦	賦
17	綽	不明	綽	欠	綽
18	貢	不明	不明	貢	貢

(この表で「不明」とあるのは言及がない場合、「欠」はその部分が残欠していることを示す。)

これら18条中、「竹簡論語」の語句が鄭玄の指摘する魯論と一致するのは、表中の番号で示せば1, 2, 4, 6, 7, 11の6条である。そして「竹簡論語」の語句が古論と一致するのも3, 8, 9, 10, 12, 15の6条で、一致するのが魯論と古論と同数である。これは、鄭玄の「魯論詠正」によってわずかに知り

得る魯論と古論との情報である。もし前節で推測したように「竹簡論語」が魯論の系統に属するならば、このことをどのように考えたらいいのだろうか。一つの考え方は、「竹簡論語」は魯論と近いテキストではあるが、古論からの影響も受けていたとすることである。そう考える拠り所は、堯曰篇の末尾に、古論から取ったと思われる「子曰不知命」章が付加されていたことで、それが後から加えた形でも、古論からとった章が記されるということは、本文中にも何かの影響があるのではないかと推測するのである。もう一つの考え方は、鄭玄は「魯読」といって魯論を示し「古」といって古論を示しているが、釈文序録に「鄭玄就魯論、張、包、周之篇章、考之齊、古」と記すところから見ると、その「魯読」の「魯」とは、魯論ばかりでなく、広く張侯論、包咸、周氏のテキストまでを含めていて、そうであれば、張侯論を通じて齊論の影響を受けているはずである。となれば、同じく魯論といっても、かつての魯論から「変質」している可能性がある。もちろん、「魯論」が「変質」しているといっ、その具体的な証しがあるわけではないし、まして、鄭玄のいう「魯論」が以前に「古論」の影響を受けているという具体的な証拠を論語の伝承において示すことができるわけではない。ただ「竹簡論語」が、鄭玄の示す魯論と古論とに同数で一致することからこのように推測してみるのである。

始めにも触れたように、「竹簡論語」に残存する部分に限ると「魯論読正」で魯論に言及するのはわずかに15例にすぎない。例としてはあまりにも少ない。また齊論については、このような指摘すらまったくできないのである。

以上のような問題が存在することを指摘して、「竹簡論語」と鄭玄のいう魯論とがこの程度に関連するテキストであることを明らかにしておこう。

2.2 「竹簡論語」と漢石経

次に、「竹簡論語」と漢石経とを比較することによって、両本がテキストとしていかなる関係になるかを明らかにしよう。「竹簡論語」「漢石経」「鄭注本」「集解本」の異同については、すでに示した⁽¹³⁾。その中から、「竹簡論語」と「漢石経」とが異なる箇所を取り出すと以下のようなようである。(空欄はそれぞれのテキストにおいて残欠している部分である。)

	竹簡論語	漢石経
(1)	無	毋
(2)	智	知

(3)	乎	于
(4)	維	惟
(5)	愧	神
(6)	彘彘	郁郁
(7)	踰	喻
(8)	動	懂
(9)	零咏	宇咏
* (10)	則非國也與	則非國與焉
(11)	又三年	有三年
* (12)	難矣	難矣哉
* (13)	君子亦有 [] 乎	君子有惡乎
(14)	而山上者	而 上者
(15)	潔	絜
(16)	至遠	致遠
(17)	遊	旂
* (18)	則仕仕而	則學學而
(19)	辟諸宮牆	辟諸宮蔭
(20)	中尼	仲尼
(21)	壹言	一言
* (22)	罪罪	罪
* (23)	寬得衆	寬則得衆
* (24)	問於子曰	問於孔子曰
* (25)	可以	斯可以
* (26)	不亦	斯不亦

これらの「竹簡論語」と漢石経との異同を比べてみると分かるように、その多くは字体の差異あるいは仮借字による差異と見られるものが多く、テキストによる差異と思われるものは、*をつけた条であってそれほど多くない。ここから、「竹簡論語」と漢石経とは、明らかに近似の関係にあるテキストといえるのである。

以上は「竹簡論語」と漢石経とのそれぞれに残存する部分によって明らかにし得る差異である。両者が近似の関係にあるテキストであろうということは、ほかにも証拠がある。それは、馬衡がすでに指摘しているように⁽¹⁴⁾、漢石経堯曰篇には第三章「孔子曰不知命」が無く、すでに述べたように「竹簡論語」

にも元来この章が無かったと考えられるから、この点からも、両者が近似したテキストであることが認められるのである。

2.3 「子曰不知命」章の検討

1.2で見たように堯曰篇は従来問題の多い篇であった。先に検討したように、漢書芸文志の「論語古二十一篇。出孔子壁中，兩子張」という記述，そしてこれに関する如淳の注「分堯曰篇後子張問『何如可以從政』已下爲篇，名曰從政」，さらに經典釈文が引く鄭玄の「魯論読正」にもとづいて，古論は，「堯曰咨」章が堯曰篇，「子張問於孔子」章以下が子張篇，それに対して魯論は「堯曰咨」「子張問於孔子」の二章で堯曰篇が構成され，「子曰不知命」章はなかったとみた。

ここであらためて「竹簡論語」堯曰篇の末尾に書き入れられている「子曰不知命」章について検討してみることにする。その文をもう一度記せばつぎのようである。

- ・子曰，“不知命，無以爲君子；不知禮，無以
- ・立〔也；不知〕言，無以知〔人也〕。”

「竹簡論語」に付記される校勘記によれば，「子曰不知命」章の部分は文字の大きさ，記述の形式の点で他の部分と区別されるという。さらに，「竹簡論語」には章数と字数とを示す竹簡があり，その中に「凡二章 [凡三百廿二字]」なるものがあり，この簡が堯曰篇の章数を示したものと考えられるので，これによって「竹簡論語」の堯曰篇が二章から構成されていたものと推定されるのである。以上はすでに検討したように「竹簡論語」が魯論であることの有力な根拠としたことである。

すると「竹簡論語」において，明らかに他と異なる形式で付記される「子曰不知命」章は，鄭玄の「魯論読正」によるかぎり，元来魯論である「竹簡論語」になかったものが古論に由来してここに記されたものと考えられる⁽¹⁹⁾。かくて，ここから次の仮説が導き出されるであろう。その一は，「竹簡論語」の当時，「子曰不知命」章をもつ論語，すなわち古論がすでに存在していたこと，その二は，魯論である「竹簡論語」に古論のこの章が記されているということは，この当時魯論と古論という系統を異にする論語に交渉があったということである。

私は論語の伝授を三期に時期区分した。その時期区分によれば，「竹簡論語」はまさに第一期から第二期へ交替する時期に当たっていた。「竹簡論語」に

「子曰不知命」章がこのような形で付記されているということは、第一期をあらためて三論並立時期と認めてよいと思う。なぜ改めてこのように言うかといえば、三論のうちの古論については、漢書芸文志には「論語古二十一篇」と記されるが、その伝授については言及されない。また集解序によっても、古論については孔安国が訓解を作るのみで、世に伝わらずとされ、その確かな存在は馬融（後79-166）まで待たなければならなかった。しかし、「竹簡論語」に明らかに他の系統のテキストによったと思われるこの章が後から書き加えられているということは、「竹簡論語」が書写された当時この章を持った別の系統の論語が存在していたことを意味する。そしてこの章を持つ別の系統の論語とは、鄭玄によれば古論のはずである。よって「竹簡論語」が書写された当時、魯論や齊論、そして古論の三論が並立していたことになるはずである。漢書芸文志が論語のテキストの記述を古論を含む三論から始めることの正しさが改めて確かめられることになり、ここからたしかに三論が並立していた時期があり、それを時期区分して第一期と見なす妥当性が認められるであろう。

さらに第二期の二論交渉を、張禹による魯論と齊論とのかかわりで見たが、こうした交渉は魯論と古論とにおいても行なわれていたことを「竹簡論語」は明らかにするのではなからうか。張禹による魯論と齊論との交渉は、集解序の記すところによれば「本受魯論，兼講齊論，善者從之」とある。また張禹の漢書本伝によれば、「始魯扶卿及夏侯勝、王陽、蕭望之、韋玄成皆說論語，篇第或異。禹先事王陽，後從庸生，采獲所安，最後出而尊貴。」とある。本伝に見える夏侯勝、蕭望之、韋玄成はいずれも魯論を伝えた人であり、王陽、庸生は齊論を伝えた人といわれる。これらの記述に従えば、魯論にもとづきさらに齊論を取り入れたというのであるから、二系統の論語を総合的に比較し、検討しているように読める。

それに対して、魯論である「竹簡論語」と古論の交渉は、「竹簡論語」の端に書き付けられているだけであり、このことを二論交渉ということにあるいは疑義を持つ向きがあるかもしれない。しかし、「竹簡論語」を所持していた人は、二系統の論語を比べ合わせて「竹簡論語」にこの「子曰不知命」章が欠けていると判断して補ったはずである。ということは、二百年後に鄭玄が「魯論読正」において行なった「魯論無此章，今從古論」として「子曰不知命」章を補ったと同じことが、この時すでに行なわれていたことになる。集解序にいう張禹の「善者從之」が、具体的にどのようなことを指すのか不明である時、「竹簡論語」のこの一条の書き入れが、当時の学問の在り方を明らかにする上

で大きな意味があることに気付かなければならないのである。

張馮が魯論にもとづき齊論の善きものを取り入れたように、ほぼ同じ時期に魯論にもとづき古論を取り入れた人がいたのであり、こうした系統を異にする二論の交渉は、論語の伝授においてそれまでとは異なる時代に入っていたと言えるのではなかろうか。

3.0 まとめ

「竹簡論語」がテキストとして三論のいずれにもっとも近似するかということを考えてきた。その結果、蕭望之の奏議が一緒に出土したこと、堯曰篇が二章で構成されていること、鄭玄の「魯論読正」に示される魯論の語句との差異、漢石経との近似関係、これらのいずれからでも、この「竹簡論語」が魯論に近似したテキストであるとすることを否定するような論拠は出てこない。よって、「竹簡論語」を魯論に属するテキストであると結論づけるのである。

さらに「竹簡論語」の末尾に記される「子曰不知命」章から、この当時には古論も行なわれていたこと、そして、二論の交渉が魯論と齊論ばかりでなく、魯論と古論とにおいても始まっていること、さらに鄭玄にさかのぼること二百年前に、「子曰不知命」章を補おうとした人がいたことをこの「竹簡論語」は示しているのである。以上記したことは論語の伝授の様相を明らかにする上で大きな意味を持つのである。これらのことは「竹簡論語」を見ることによって初めて知り得ることである。

注

- (1) 「定州漢墓竹簡『論語』」試探 (一) は、「中国文化」第57号 1999年6月に発表。
「定州漢墓竹簡『論語』」試探 (二) は、「大妻女子大学紀要一文系一」第32号(平成12年3月20日)に発表。
- (2) 漢書藝文志は、論語のテキストと伝授についてはつぎのように記す。

論語古二十一篇。 出孔子壁中，兩子張。

齊二十二篇。 多問王、知道。

魯二十篇，傳十九篇。

齊說二十九篇。

魯夏侯說二十一篇。

魯安昌侯說二十一篇。

魯王駿說二十篇。

漢興、有齊魯之說。傳齊論者、昌邑中尉王吉、少府宋畸、御史大夫貢禹、尙書令五鹿充宗、膠東庸生、唯王陽名家。

傳魯論語者、常山都尉龔奮、長信少府夏侯勝、丞相韋賢、魯扶卿、前將軍蕭望之、安昌侯張禹、皆名家。張氏最後而行於世。

(3) このことは釈文序録にはより詳細に記されている。

安昌侯張禹受魯論于夏侯建、又從庸生、王吉受齊論、擇善而從、號曰張侯論。最後而行於漢世。禹以論授成帝、後漢包咸、周氏竝爲章句、列于學官。

(4) 同じことを釈文序録はつぎのように記す。

鄭玄就魯論、張、包、周之篇章、考之齊古、爲之注焉。

(5) 漢書卷81 匡張孔馬伝第51 につぎのようにいう。

初元中、立皇太子、而博士鄭寬中以尙書授太子、薦言禹善論語。

ここに示される初元中は、BC49—44であり、「竹簡論語」が抄写されたといわれる下限時期の五鳳三年BC55にきわめて近い。

(6) 「定州漢墓竹簡『論語』紹介」(劉來成執筆)に次のようにいう。

蕭望之在當時是皇太子的老師、是傳授「魯論」的大師。劉脩死後把「論語」同蕭望之的奏義放在一起、應不是偶然的。

(7) 清の翟頌は、古論の子張篇についてつぎのように言う。

陽貨篇にみえる「子張問仁於孔子。孔子曰……」は元來堯曰篇にあつたもので、それが陽貨篇に竄入したものである。であるから、古論の子張篇は「子張問仁」章と「子張問政」章の二章からなつてゐた。

武内義雄もまたこの説を認めている。

「竹簡論語」には「子張問仁」と「子張問政」の二章がみえる。ただ「竹簡論語」の「前言」によれば発見の時に竹簡は「散乱残断」という状態にあり、更に整理の過程でも「損毀」されたという。「竹簡論語」は、このような断片状態の竹簡を今本の論語の篇と章の次序によって配列し直したものである。そうであれば、残念ながらこうした問題の反証とはならないのである。

(8) 康有為は魯論の堯曰篇について、「堯曰咨」章と「子張問政」章の二章からなつてゐるとする。そして、釈文が「魯論詠正」によつて古論とみなす「子曰不知命」章を、斉論とみなす(その説は康有為「論語注」堯曰第二十の注にみえる)。康有為が斉論とみなす根拠は、この章が韓詩外伝卷六に見えるからであるが、釈文の「魯論詠正」を否定できない限り、康有為説もまた認めることはできないはずである。

(9) 「竹簡論語・堯曰篇校勘記⑳」に次のようにいう。

這一部分今本別爲一章。簡本在此用二個圓點間隔、以雙行小字書于此簡的下部。

(10) 「竹簡論語・校勘記㉑」につぎのようにいう。

此章數簡由整理者據今本章數及字數擬排。

(11) 「竹簡論語」の編者は、なぜか堯曰篇第三章について、經典釈文の「魯論無此章、

今從古」説に依らないで、かえて康有為の第三章を齊論とする説（その「論語注」堯曰第二十に見える）によって、三章が齊論である可能性をも示唆して次のようにいう。

這後一章與前一章既有間隔又相連接地附在後面，或許就是「齊論」中有，而「魯論」中無的部分，抑或「古論」後面的部分？（定州漢墓竹簡《論語》介紹）

康説の第三章を齊論とするのは、あくまでも仮説による立論であつて、資料に基づく説ではない。古論の成立と伝授とがあまりさかのぼることがないとみて、このように考えるのであろうか。

ここでひとつ注目しておくことがある。それは、「竹簡論語」が今われわれが目にしてゐる論語と字体などに差異はあつても、行文はほぼ同じであることである。というのも、もしも「竹簡論語」が齊論であるならば、漢志に齊論は「魯論より頗ぶる多し」といわれることから推察して、今の論語に見えない文が存在する可能性が考えられるからである。それが今本論語の範囲に収まるということは、今本論語が魯論と関連するテキストであることと考え合わせると、この「竹簡論語」もまた魯論と関連を持つテキストであることの間接的証拠となるのである。

(12) 鄭玄の「魯論詁正」については拙論『『經典釈文・論語音義』考（一）～（六）』（東京外国語大学論集45～60）を参照。

(13) 本注（1）に示した拙稿（一）の「3、2」を参照。

(14) 馬衡「漢石經集存・説明」に次のようにいう。

論語爲專經者所兼習，不立博士。漢書藝文志言論語有齊、魯、古三家，古論二十一篇，齊論二十二篇，魯論二十篇。洪氏隸釋所錄論語篇末有「凡二十篇萬五千七百一〇」字之紀數，是魯論之篇數也；今出堯曰篇殘石，謂之有司」下，即接「凡二」二字，其下當是章字。陸德明釋文於堯曰篇出「孔子曰不知命無以爲君子也」注云：「魯論無此章，今從古」。是堯曰篇之二章，亦魯論之章數也。然校記中未見「齊、古」字，而有「蓋毛包周」字。釋文序錄言「安昌侯張禹受魯論於夏侯建，又從庸生、王吉受齊論，擇善而從，號曰「張侯論」，最後而行於漢世。禹以論授成帝，後漢包咸（字子長，吳人，大鴻臚）周氏（不詳何人）竝爲章句，列於學官。鄭玄就魯論張、包、周之篇章，考之齊、古，爲之注焉」。蓋毛今無可考。校記中有一石，蓋毛上有一從弓之字，羅振玉氏謂即張禹之張，是校記中又添一家矣。以是知後漢博士之所授，石經之所刻，確爲魯論也。

石經論語每行約七十四字，以今本校之，異文特多，字數時有盈絀。篇題發見公冶長、子張二篇，皆頂格書，其下當有大題「論語」字。每篇分章處空格加點。每篇之末，記其章數曰「凡若干章」。最後記其全經之篇數及字之總數，如隸釋所錄者，是也。

ただ馬衡は、別に漢石經論語の底本が張侯論であるともいう（「漢熹平石經論語堯曰篇殘字跋」『凡將齋金石叢稿』1977，中華書局）同様の説は、武内義雄も述べているが、これには疑問もある（渡辺幸三「漢石經論語底本非張侯論考」・支那学第六卷第四号昭和七年十二月）参照。

(15) 重ねて付記すれば、鄭玄の「魯論詁正」による限り、「子曰不知命」章は古論に由来するものとなる。それでは齊論ではどうであったかとなると、それに関する記述がないので不明といわざるをえない。もしこの章が齊論にも存したのであれば、鄭玄にその指摘があるはずで、そうした記述が無いことは、その当時すでに不明となっていたのか、或いは存しなかったのであろう。

付注1) 「竹簡論語」については、たとえば、述而篇の「……以學，亦可以毋大過矣」となっていて、亦字が易字ではないこと、また、一字と壹字とが使い分けられているのではないかと、ということ、また「竹簡論語」の字体から今のテキストから知り得ない訓詁を浮かび上がらせることが出来るかもしれない。いずれ、機会を改めて考えたい。

付注2) 漢石経が作られた時期、最も行われていたのは張侯論であったらうから、漢石経の底本となっているのは張侯論であろうという説が立てられる。(馬衡「漢熹平石經論語堯曰篇殘字跋」『凡將齋金石叢稿』所収)もしこの説が認められて張侯論であるとすると、張侯論は魯論に齊論を参考して校訂されたものであるから、そこには、魯論が齊論によって改められた箇所が有るはずである。「竹簡論語」が魯論であることは疑いないから、漢石経を「竹簡論語」と比べて異なる箇所があったが、それが張侯論が齊論によって改められた箇所であるかも知れない。齊論、張侯論といずれもその実体がわからない。あくまでも推論である。ここに注として示して備忘とする。

付注3) 「竹簡論語」に付加されるかたちで書かれている堯曰篇第三章は、何により、そしてどのように付加されたのか、私はこの論では、鄭玄の釈文の説により古論であるとしたが、このことにまったく疑いがないわけではない。

(大妻女子大学)